

エッセの執筆の仕方について*

家永 道生

Sur la méthode d'écrire les *Essais*

par

Michio IENAGA

C'est le naturisme qui fait la base de la pensée de Montaigne. A cette étude, nous éclairerons la manifestation de son naturisme dans la méthode d'écrire les *Essais*. Mais, puisqu'il y a beaucoup d'éléments dans le problème de cette méthode, nous traiterons ici seulement la question suivante : pourquoi a-t-il inséré un grand nombre d'additions dans ses *Essais*?

Montaigne continuait à ajouter les additions aux *Essais*; par exemple, de 1586 à 1588 il a augmenté plus de 500 additions environ, et de 1588 à 1592 plus de 1300 additions environ. Mais, puisque sa pensée changeait avec le temps, ces additions produisaient souvent les contradictions dans le contenu des *Essais*. Pourtant il a publié ces *Essais* sans les mettre en ordre. Pourquoi a-t-il fait paraître cet espèce des *Essais*?

Pour Montaigne, sans doute, le moi qui a écrit ses *Essais* et le moi qui écrit l'addition sont ensemble le vrai moi et c'est conforme à l'ordre naturel de montrer le vrai moi quoiqu'il se contredise parfois.

はじめに⁽¹⁾

モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533. 2. 28-1592. 9. 13) の思想の根幹が、自然 nature の尊重にあることは明らかであるが、その自然尊重がどのような内容を持ったものであるかを、筆者も多年にわたって究明してきた。その内容の哲学的な点を簡略に纏めれば、モンテーニュは、「汝自身を知れ」という哲学の基本的課題を、自然に直接する

ものとしての人間の自己の、内的反省によって解決しようとし、この道ゆきの中で、彼が彼自身であることを獲得したのであると言えることができるであろう⁽²⁾

この論文は、モンテーニュのこうした自然主義が、エッセの執筆の仕方に、いかに顕われているかを究明しようとするものである。しかし、彼がエッセを執筆する仕方の全体を扱うとすれば、そこには、実に多くの問題が含まれているので、当論文はとりわけ、エッセ執筆の仕方の一つであ

* 水産大学校研究業績 第944号, 1982年2月10日受理。

Article reçu le 10 février 1982 et numéroté 944 par l'Université des Pêches de Shimonoseki.

るところの、加筆に加筆を重ねるというやり方をとりあげ、この中に、いかにモンテーニュの自然尊重が顕われているかを究明するであろう。

1. エッセ諸版に見られる加筆について

エッセへの加筆は、改訂版の変化によって見るのが最も明白であるから、ここでは、エッセ各版の内容を見てみよう。

第一版 (1580年)

現在われわれが通常に見るエッセ三巻のうちの、初めの二巻が刊行された。第一巻は57章から成り、第二巻は37章から成っている。

第二版 (1582年)

第一版とほとんど同じ内容で、極く少数の加筆を加えて出版された。

第三版 (1587年)

第二版と、ほぼ同じ内容で発行された。

第四版 (1588年)

今までの二つの巻の諸章に、500項余りの加筆と、重要ではない約1000の修正とを加え、さらに第三巻が加えられた。第三巻は13章から成っている。

第五版 (1595年)

第四版の諸章に、モンテーニュが、1592年の死の直前まで加筆していたが、この書き込みを本文の中に移し入れて、エッセの心酔者グルネ嬢 (Marie le Jars de Gournay, 1565-1645) の校閲を経て、彼女によって出版された。

この書き込みは、およそ1300項の加筆と、重要ではない約3500の修正とから成っている。⁴¹⁾

以上が、各版の印刷上明らかな加筆の模様である。⁴²⁾

尤も、第五版は、モンテーニュが死の直前まで加筆していた書き込み本 (通称「ボルドー本」と) と較べてみると、多くの相違があることが判明したので、モンテーニュを郷土の偉人として持つボルドー市が、数人の学者 (F. Strowski, F. Gebelin と P. Villey) に依頼して、厳密に「ボルドー本」に依拠すると共に、諸版の異同を明示した *Essais* の決定版 (通称「ボルドー市版」) を、今世紀の初めに刊行した。⁴³⁾

ところで、上記の第一・二・三・四版とボルドー本のうちで、特徴的な内容を持つものとして取り上げられねばならないのは、初版・四版・ボルドー本の三者である。したがって現在刊行されている *Essais* は通常——ボルドー市版に拠りながら——三者の内容をそれぞれ A・B・C (もしくはそれに類した符号) で明示している。

すなわち、A・B・C とその内容について纏めて言えば、A は初版の内容を示し、

B は1588年版の加筆・増巻部分を示し、

C は88年版へのモンテーニュの加筆部分を示している

ということになる。

しかし、上記のようなエッセの補筆の仕方を見ると、以前のエッセに加筆を挿入していくというモンテーニュの執筆法は、エッセ刊行後のみならず、初版発行以前においても行われていたであろうという事を、十分に推定させる。この推定は、エッセの成立についてなされた Villey の著名な研究、《モンテーニュのエッセの源泉と進展 *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*》(Hachette, 1908) によって、大方の受け入れることのできる裏付けを得ているように思われる。したがって、これからの論述も A・B・C を中心に話を進めてゆくものの、エッセは初版発行以前にも著者によって加筆を受けたであろうという立場で、我々はゆきたいと思う。

2. 諸版の変化によってエッセはどのような性格を与えられたか

ところで我々は、次に、エッセが A から AB へ、AB から ABC へと変化したことによって、エッセにどのような性格が与えられたかについて考えてみたい。

まず、B における第三巻の出現は——この巻に含まれる内容が、一・二巻に較べて、より一層の深味を持ち、また円熟もしているところから——エッセに、真にモンテーニュのエッセらしきを与えたと言ひ得るであろう。

また、B・C の加筆によらず、一般にモンテーニュの加筆は、各章の内容に展開を与え、つまりは各章に一層の豊かさを与えたのも事実である。

そして修正は、用語や表現に、一層の適切さ、明確さ、力強さ等を与えたと思われる。

しかしその反面、A・B・C の符号を伴わないエッセ——モンテーニュは、まさしくそれを読者に提供したのであるが——に接した今世紀初めまでの一般読者は、叙述の脱線や屢々見られる文脈の乱れ、そして内容の矛盾といったものに悩まされたであろうことは、否めない事実であろう。

全くのところ、モンテーニュの立場は、エッセのペンを執り始めた1572年頃⁴⁴⁾ から、1592年の死に至るまでの約20年間に、多くの転変を重ねた。彼の態度は、ストア主義的な精神の高揚から懷疑主義的態度へ、次いで自己と人間性の肯定、自然に直接する自己の研究へ、別の言い方をすれば

ば、ストア主義的緊張から人間的自己に落ち着いた快楽主義的あり方へと転変する。

これらの異なった態度が、編年的に並べて提示されるのではなく、気の赴くままに繋ぎ合わされて提示された筈での読者が、もしそこにモンテーニュ思想の核心を見出そうとするならば、譬えて言えばこの人は、日付のない沢山の出納伝票を前にして、月毎の収支決算をしようとする会計係に似た心境ではなかったであろうか。

そうした読者がさらに困るであろうことを付け加えれば、モンテーニュ自身、《私の各章の標題は、必ずしもその内容を表わしてはいない Les noms de mes chapitres n'en embrassent pas toujours la matiere ;》(III-9, p. 994) と述べているように、諸章の表題と内容は往々にして一致しないという事がある。ここから起こる事態をさきほどの譬えに付け加えて言えば、この会計係はおまけに、どの種の伝票がどの引き出しに入っているかも殆んどわからないで、途方に暮れるというのに似ているであろう。

したがって、立場が変化したにもかかわらず、あとからあとから挿入される加筆によって、エッセは種々の利益を受けた反面、叙述が無秩序さの中に放置される結果にもなったと言えるであろう。

3. モンテーニュはどうしてエッセを無秩序なままにしておいたか

モンテーニュは、このような無秩序さの中に、どうして *Essais* を放置しておいたのであろうか。

そもそも、このような状態を無秩序だと見做す感覚を、モンテーニュは持っていたのだろうか。逆に言えば、述べようと思う事柄の内容を分析し、分析の結果知られた各要素に関して、順序を追って述べてゆくという、組織だった叙述法を、モンテーニュは知っていたのだろうか、という基礎的な疑問が先ず浮かんでくるかもしれない。この問に対しては、彼は組織立った叙述の仕方を、十二分に知っていた筈だと言わねばならないであろう。なぜなら、彼は、よく知られているように、非常な説書家であって、説んだ著作家も、アリストテレス、プラトン、キケロ、セネカ等をはじめ多数にのぼっている⁽⁷⁾からである。また、単に説んだばかりではなく、彼は、秩序立った著作である「自然神学」という書物を訳することもしたのである。

この書物は、レモン・スボン (Raimond Sebon(d), ?-1436) というスペインの神学者によって、ラテン語で書かれたものである。その内容については、モンテーニュによって、《彼 [スボン] は、無神論者に対して、キリスト教信仰

の全箇条を、人間的・自然的理由によって確立し証明しようとして企てている il (R. Sebon) *entreprend, par raisons humaines et naturelles, établir et verifier*⁽⁸⁾ *contre les atheistes tous les articles de la religion Chrestienne* :》

(II-12, p. 440) と述べられている。また、この書物の結構について言えば、モンテーニュが、《その著作の構成は実に首尾一貫したものだとは私は思った。Je trouvay. . . la *contexture de son (= de Sebon) ouvrage bien suyvie* (id., id.) と述べているように、よく整った叙述法をとっているという印象を我々に与える。

また、この翻訳を、アルマンゴー A. Armaingaud の編集になるモンテーニュ全集において見ると、815頁を占め、20万語を超えているから、この職業に携わったモンテーニュに、組織立ち、秩序立った著作のあり方が、よく知られていなかったとは言えないであろう。

してみると、モンテーニュは、首尾一貫し、組織立った叙述の仕方をよく知っていたにもかかわらず、なお且つエッセを無秩序な書き方のままにしておいたのだと、我々は言わざるを得ないであろう。

では彼が、エッセをこのような無秩序の中に放置しておいた積極的理由は何であろうか。

16世紀のフランスのうちでも、とりわけ、モンテーニュの生きた時代は、新旧両教徒による内乱の時代であった。このことに着目すれば、エッセのこの無秩序な書き方は、彼の真の思想を晦ますための、一方法だったと言うこともできるであろう。事実モンテーニュ自身が次のように記している。《私の文体も私の精神も、同じようにさ迷い続けている。一層おろかになりたくないなら、少しだけ馬鹿にならなければならない。我々の先生方の教訓が、いや彼等の実例の方が一層、そう言っている。Mon stile et mon esprit vont *vagabondant de mesmes*⁽⁹⁾. Il faut avoir un peu de folie qui⁽¹⁰⁾ ne veut avoir plus de sottise, disent et les preceptes de nos maistres et encores plus leurs exemples.》(III-9, p. 994-5) と。このような言辭は、彼のいつわらざる心境の一端を示しているものと言えよう。例えば、エッセ第二巻十二章は、カトリックを弁護するという体裁になっているにもかかわらず、その内実は、*Essais* の英訳者 Trechmann が指摘するように、《この章全体が、キリスト教信仰一般への攻撃である》⁽¹¹⁾ と見做され得るのである。したがって、エッセの雑然とした書き方は、宗教的にささくれ立ち、異端糾問にも厳しかったこの当時における、モンテーニュの思想陥穽の一方法だったことは否めないであろう。

けれども、エッセエに含まれる無秩序や自己矛盾が、モンテーニュの立場の陥穽の為だけだったとは考えられない。なぜなら、彼の思想は、実際のところ変化したのであるし、また、人は変化するものであるという事は、彼が最終的に到達した思想の、抜き難い一要素を成していたからである。モンテーニュはこう記す。《世界は永遠の動揺に過ぎない。そこではあらゆるものが絶えず動いている。大地も、コーカサスの岩も、エジプトのピラミッドも、世界全体の動きとそれら自身の動きによって、絶えず動いている。恒常すら、より緩やかな動き以外のものではない。Le monde n'est qu'une branloire perenne.⁽¹²⁾ Toutes choses y branlent sans cesse: la terre, les rochers du Caucase, les pyramides d'Égypte, et du branle public et du leur. La constance mesme n'est autre chose qu'un branle plus languissant.》(III-2, p. 804-5) と。

だからモンテーニュは、変化している自分を描いてゆく。仮りにその為のエッセエが矛盾したとしても、その時点時点における自分を描いたという点では真実に適っているからである。《私は移りゆきを描く。1年毎の移りゆきではなく、或る人々の言うように7年毎のではなくて、日ごと分ごとの移りゆきである。……要するところ、私はまさしく自己矛盾しているでもあろう。しかし真実に対しては……私は矛盾してはいない。Je peints le passage: non un passage d'aage en autre, ou, comme dict le peuple, de sept en sept ans, mais de jour en jour, de minute en minute. . . Tant y a que je me contredits bien à l'aventure,⁽¹³⁾ mais la vérité. . . , je ne la contredy point.》(id., p.805) と彼は記す。

そして、モンテーニュにとっては、真実の自分を描くという事は、自然な自分を描くということでもある。彼は次のように言う。《私は、運命よりほかには、エッセエの諸部分を整列させる隊長を持たない。私の夢が現われるにしたがって、私はそれらを積み重ねる。時にはそれらは群がって押しよせ、時には1列になって通ってゆく。私は、私の自然な・普段の歩みを見て貰いたい。たとえそれがどんなに乱れたものであっても。Je n'ay point d'autre sergent de bande⁽¹⁴⁾ à ranger mes pieces que la fortune. A mesme que⁽¹⁵⁾ mes resveries se presentent, je les entasse; tantost elles se pressent en foule, tantost elles se traient à la file. Je veux qu'on voye mon pas naturel et ordinaire, ainsin detraqué qu'il est.》(II-10, p. 409) と。

ところで、さきに私達は、モンテーニュがエッセエを、加筆によって生じる無秩序のままにしておいた積極的理由は

何であるかと尋ねたのであるが、これに対して彼は次のように答えるように思われる。「宗教的に争い合い、また異端糾問の厳しい世の中であるから、余りはつきりとは、自分の立場が見透せない方がよいということもある。また他面、“以前のエッセエを記した自分も自分であったし、そのちに加筆した自分もやはり自分であるから、或る自分によって他の時の自分を抹殺して、エッセエに秩序をもたらすのは真実に反する。したがって私は、加筆が時にエッセエに無秩序をもたらすとしても、加筆したままに放置するのである。このようなエッセエをそのままに示すことが、ありのままの、自然な、真実の自分を示すことになる、”と思うのだ。」と。

結 語

モンテーニュは、エッセエ形成に際して、以前に書いたエッセエに加筆をおこなうという記し方を用いたのであるが、当論文のように解してよければ、彼の自然尊重は、加筆によって生じる無秩序をそのままに放置したという点に顕われていると思われる。即ち、一見無秩序に見えるこの状態の方が、却って自然の秩序に即しているのだと、彼は言っているように思われる。

註

(1) 当論文に用いたエッセエの原書および略号等は、次に記す通りである。

(i) 引用原典：当論文に挙げる *Essais* の原典箇所は、(i) Pierre Villey, *Les Essais de Michel de Montaigne*. (l'édition réimprimée sous la direction de V.-L. Saulnier) (P. U. F., 1965) の頁数を示す。また、引用原文箇所として、“II-3, p. 357” という風に記す場合、(上記原書は、元来の *Essais* I・II・III巻が纏められて一冊本となっているが) *Essais* の元来の第二巻第三章、上記原書の357頁めに、その原文が見出されることを示す。

また、当論文作製において絶えず参照したもう一つの原典は、*Essais* の最も厳密な校定本である“ポルドー市版”(ii) F. Strowski, F. Gebelin et P. Villey, *Les Essais de Michel de Montaigne*, (Bordeaux, Pech, 1906-1933) である。その他、次の三つの *Essais* も随時参考にした。(iii) A. Armaingaud, *Œuvres complètes de Michel de Montaigne*, Conard, 1929-1941, (iv) A. Thibaudet et M. Rat, *Œuvres complètes de Montaigne*, Pléiade, 1962, (v) M. Rat, *Les Essais*, Garnier, 1952 である。

- (ii) 略号：上記の諸本を次のように略記する。
 (イ)→Vil., (ロ)→Bor. (ハ)→Ar., (ニ)→Thi., (ホ)→Ra.
 更に、(ロ)の第五巻めをなす *Lexique de la langue des Essais* の略号は、Lex. とする。
- (iii) 〈 〉：原文の忠実な引用を示す。
- (iv) また、モンテーニュの用いている16世紀フランス語が、現代のそれと著しく異なる場合は、Vil., Ra. の註および Lex. を用いて、現代フランス語の意味を註記した。
- (2) 拙論「モンテーニュにおける反省」(澤瀉久敬編「フランスの哲学」①東京大学出版会、1975所載)参照。
- (3) 以上の、エッセ諸版についての記述は下記の文献に拠った。M. Weiler, *La pensée de Montaigne*, Bordas, 1948; P. Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, および Thi.
- なお、本文中で、1588年版を「第四版」と記したが、この版本の扉には、第五版と印刷されていると言われる (cf. 関根秀雄「モンテーニュとその時代」白水社、1976 の巻末からの頁付けによる45頁)。Maurice Rat は、この88年版以前には80年版、82年版、87年版の3版しか知られないと述べている (cf. Ra. tome I p. XXXVIII)。
- (4) 本文でのちに述べるところであるが、このような「加筆」というやり方は、初版発行以前にもおこなわれたと見做す方が妥当であろう。
- (5) この公刊は、1906年に始まったが、最後の第五巻(エッセ用語辞典と、エッセの索引を含む)が出版されるまでには、27年を要した。
- (6) Cf. Vil. p. 32.
- (7) モンテーニュが、1570年から1592年にわたって読んだ作家の数を、Villey の研究によって数えてみると、140余名とそのほか大勢となる。(cf. P. Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, 第一巻巻末の表)
- (8) Démontrer.
- (9) L'un comme l'autre.
- (10) Si l'on.
- (11) (A careful reading of this [=book II, chapter 12], the most important and most interesting of the Essays, seems to make it pretty clear, if we keep in mind Montaigne's hint to the wise to 'catch his meaning' and read between the lines, that the title was intentionally misleading, and that the whole chapter is an attack on Christian beliefs in general.) (*The Essays of Montaigne*, translated by E. J. Trechmann, Oxford U. P., 1927, p. 428) ちなみに、このII巻12章は、「レモン・スポン弁護」すなわち「カトリック弁護」という意味の標題を持ち、上の英文は、この標題に付された註である。
- (12) Éternelle.
- (13) Peut-être.
- (14) Sergent de bataille (officier chargé de ranger les troupes).
- (15) A mesure que.